

チェック
しよう!

柴で気を付け

4位

目の病気

目の疾患は、目に傷がつく「角膜損傷」、アレルギーや逆さまつ毛によっても起こる「結膜炎」のほか、「白内障」、「緑内障」などが柴では比較的好く見られます。逆さまつ毛の「睫毛重生」、「瞳孔膜遺残」、「角膜ジストロフィー」、「硝子体変性」、「隅角形成異常」、「ぶどう膜炎」といった病気もポピュラーです。診断には専門的な知識が必要ですから、眼科専門の獣医師に診てもらおうとよいでしょう。

なかでも中年期から問題になるのは眼圧が高くなる「緑内障」です。まず、自分の目を強く押ししてみてください。それが眼圧の高い状態と似ています。最終的には眼球が突出したようになり、早ければ2日ほどで視力を失うこともあります。食欲不振、元気がなくなる、目を気にするといった症状が見られます。初めは片目だけですが、半年のあいだに両目ともこの病気になる可能性が高いといわれています。

対処 「白目が赤い」、「ショボショボしている」などの症状があれば、迷わず動物病院へ行きましょう。緑内障の疑いがある場合は、早期に診断してすぐに眼圧を下げる治療をしてもらってください。そして、もう片側の目も大切にしておくことが重要です。

予防 目の異常の治療では、多くは点眼薬が必要となります。ふだんから目の周りをさわられることに慣らしておくとういでしょう。

3位

消化器の病気

消化器疾患は、一般的にどの犬種でも多く見られる病気です。食欲不振、嘔吐、下痢、腹痛などさまざまな症状を示します。単なる食べ過ぎや食事を変えたこと、細菌、ウイルス、寄生虫などの感染症、異物・薬物の摂取や食物アレルギー、腫瘍なども原因となり得ます。食欲がなく、急な下痢や嘔吐のような症状が慢性的に見られるなら、何かしらの腸炎を疑ってください。

対処 状態を観察すると同時に、獣医師による正確な診断と治療を受けてください。吐き気であれば3回以上、下痢であれば2回以上、また症状が2つ以上（たとえば食欲不振と下痢など）重なって見られたら、迷わず動物病院へ。その際に、排泄物などを持参したり画像に収めたものを持っていくと、診断がつきやすくなります。

予防 異物の誤食には十分注意してください。また食事や体重の管理、消化管内の寄生虫の予防などにも気を配ることが大切です。



なたい病気

文*岩崎雅和先生(岩崎動物病院)

イラスト*石崎伸子
参考資料*アニコム損害保険㈱「アニコム家族どうぶつ白書 2010」

※順位は「アニコム家族どうぶつ白書 2010」でのデータに基づきます。



柴は日本原産だけに日本で暮らしやすい犬種と言えますが、やはり気を付けたい病気はいくつかあるもの。ここでは「アニコム家族どうぶつ白書」の10年間のデータや当院でのデータを参考に、柴に起こりやすい病気を学んでいきましょう。愛するワンコのために、病気の知識を深めていただければと思います。

2位

耳の病気

耳の病気のなかでも「**耳炎**」、とくに鼓膜よりも外側の「**外耳炎**」が多く、この原因は「**好発因子**」と「**原発因子**」によって左右されます。

「**好発因子**」とは、耳の入り口から鼓膜までの耳道の湿度が高くなるような「垂れ耳」や、「耳の毛がびっしり生えている」、「耳道が狭い」などの、病気を起こしやすくする要素のこと。「**原発因子**」とは、寄生虫、異物、腫瘍、基礎疾患（アレルギーやホルモン異常）などの原因を指します。立ち耳で、毛も少なく「**好発因子**」がない柴でも外耳炎が多く見られるのは、「**原発因子**」によるものと考えられます。アレルギー性皮膚炎になった柴が、さらに外耳炎を起こすこともあります。

外耳炎は非常にかゆいため、耳をしきりに掻く、頭を何度も振るといった症状が見られます。また、耳が臭いということにも気が付くでしょう。

対処 サインを見かけたら、すぐに動物病院へ行きましょう。その際は、アレルギーの有無を調べるためにいつも食べているものを持っていったりすると診断の手助けにつながります。

予防 ふだんから、愛犬の耳のニオイを嗅いだり、赤みや腫れがないかをチェックしてください。綿棒などで耳の中をゴソゴソこすってしまうと、外耳炎の原因となってしまうこともあります。

1位

皮膚の病気

「**アレルギー性皮膚炎**」や「**アトピー性皮膚炎**」の発生が、多くの柴に認められます。皮膚が赤くなったり、赤い小さなポツポツやその周囲の脱毛などが見られたときには注意が必要です。主に目の周りや内股、脇の下、肛門周りなどの皮膚の弱い部分に症状が出ます。そのほかにも、「**外部寄生虫感染（ノミやダニ）**」や「**膿皮症**」、「**性ホルモン失調性脱毛**」も多く認められます。



アレルギー性皮膚炎で目の周りが赤くなった柴

対処 「**発赤**」、「**ポツポツ**」、「**ブツブツ**」、「**小さな腫れ**」、「**大きな腫れ**」、「**脱毛**」、「**硬い**」、「**柔らかい**」程度の症状しか皮膚には現れませんので、見た目では原因を特定することは難しいと思います。3日以上症状が継続するようなら、動物病院に一度相談してみることをお勧めします。

6位

泌尿器の疾患

一般的にどの犬種でも多く見られる病気です。泌尿器疾患は、腎臓、尿管、膀胱、尿道の異常によって起こります。主に尿の色やニオイ、回数や量の異常が見られます。なかでも「膀胱炎」、「腎不全」、「尿路結石」などにたびたびかかることがあります。泌尿器疾患の原因には単なるストレス性のものから、結石のできやすい体質、細菌感染や腫瘍によるものまでさまざまです。

対処 最も注意が必要なのは、「尿が1日じゅう出ない」という症状です。この場合は、すぐに動物病院を受診しましょう。

予防 排尿を我慢させると、膀胱内で細菌が増殖しやすくなり、膀胱炎の原因ともなります。結石のできやすい体質の犬は、決められた食事以外は与えないようにして、定期的に動物病院へ連れて行きましょう。初期の腎不全では、症状はほとんどありませんので、年に一度は定期健診を受けるようにしてください。



5位

筋骨格系の病気

一般的にどの犬種でも多く見られる病気です。「足を引きずる」、「足を上げる」、「立てない」、「震える」などの症状があれば、筋肉や骨の病気があるかもしれません。柴では「骨折」とひざのお皿が外れてしまう「膝蓋骨脱臼」が若いうちに比較的好く見られます。骨折は、ほとんどが高いところからの落下や家具などのすき間に挟まる、踏みつけられるといった事故によって起こります。痛みにより、ふだんとは異なる姿勢をしているはずですから、見ただけでおかしいのがわかるはずですが、

膝蓋骨脱臼は、膝関節の先天的要因と、滑りやすい床などの環境的要因によって起こります。最初に脱臼したときにも痛みが出ますが、何もしなくても回復され、痛みは数日で治まります。ただし1度外れると、何度も外れるようになります。スキップのように片足を上げながら走る場合は、この病気が疑われます。



左足の指が骨折している柴

対処 多くの筋骨格系疾患は手術や痛み止め、サプリメントなどの投薬が必要になります。すぐに動物病院を受診できない場合は、まずは安静にさせてください。

予防 事故防止のために、滑りやすい床などがあれば改善しましょう。犬の歩き方に注意し、動物病院での定期的なチェックを欠かさずに行うこともお勧めです。

8位

損傷、中毒その他

「熱傷」、「打撲」、「捻挫」、「外傷」、「中毒」などがこの項目に含まれます。どれも一般的に見られる病気です。やんちゃな犬は、ケンカによる外傷が多いようです。また冬などは、室内にいる時間も長くなり、いろいろな中毒物質を口にしてしまう可能性も。ポインセチアやユリなど、まさかと思うような観葉植物や草花が中毒を起こすことが知られていますので、注意が必要です。

対処 外傷に対してガーゼなどで保護をすると、犬が余計に気にしてしまい、なめて悪化させる場合もあります。足の捻挫であれば、数時間ケージなどで安静にさせます。

何か中毒を起こすようなものを食べてしまった場合、30分以内ならまだ胃の中にありますので、吐かせるなどして対応できることも。どのケースも、動物病院への相談をお勧めします。

予防 事故の起こりそうな生活環境（滑りやすい床や中毒物質の確認）の改善、しつけや健康管理を徹底してください。この疾患の多くは、飼い主さんの確認・改善によって防ぐことができます。

7位

しゅよう 腫瘍性の病気

一般的なペットの犬の寿命は、10年前に比べると1～2歳ほど延びる傾向にあります。高齢になれば、「腫瘍性疾患」の発生率は高くなってきます。そしてほかの犬種と同様に、さまざまな腫瘍が見られます。体表にできるものだけでなく、体の中にも腫瘍ができます。腫瘍は、発生したその臓器の機能を奪い、生命に支障をきたします。また、その症状もさまざまです。

対処 気になるしこりを見つけた場合には、動物病院に行き、手術も含めた検査・治療について相談しましょう。

予防 残念ながら、遺伝的要因の多い腫瘍性疾患を完全に予防する方法はありません。「早期発見・早期治療」を合言葉に、5歳を超えたら、年に1度の定期検診を積極的に受けましょう。費用が許すのであれば、CTやMRIといった画像診断も検査項目として追加してみてください。

一説によると、ストレスによって発がん率が上がることもあるようです。愛犬に過度のストレスをかけないよう気を付けましょう。

topic

柴によく見られるそのほかの病気&特有な病気

① 認知症

柴は、高齢になると「認知症」が多く見られます。認知症は、いわゆる「痴呆」です。記憶障害や認識力の低下、同じ行動を繰り返したり、いつまでも吠えていたり、夜鳴きをするなどの症状が現れます。脳自体の病気の場合もありますが、多くは老化現象です。一説には、日本犬は特殊な代謝系を持つため、魚を与えないとDHAなどが不足し、認知症の発生率が上がるともいわれています。ただし、最近ではドッグフードにもこの成分が入っているものが増えたためか、一時期よりも減っていると感じます。

<対処>

認知症の疑いがあるかどうかを動物病院でチェックしてもらいましょう。5歳を過ぎたら、脳ドック（MRIやCTによる検査）をお勧めします。

<予防>

動物病院でサプリメントの投与に関する相談をしてみてください

い。DHA（ドコサヘキサエン酸）やEPA（エイコサペンタエン酸）などが効果的です。

② GM1 ガンクリオシドーシス（ライソゾーム病）

生体内に存在する「ライソゾーム（ライソゾーム）」という酵素やその関連物質の一部もしくは完全な欠損によって引き起こされる、まれな遺伝性の障害です。柴では、この中の酵素の欠損によって、特定のたんぱく質が細胞質内に蓄積し、さまざまな全身症状が現れます。多くは脳への蓄積によって神経症状が現れ、最終的には死亡してしまうケースもあります。

<予防>

その柴が原因遺伝子を保有しているかの特殊な検査を行っている機関もあります。頭の震えや運動失調（立つことができない）、目が見えていない、歩き方が不自然といった症状が若齢で見られたら、すぐに動物病院へ相談しましょう。